

解題

塩川 徹也

ここに掲載するテキストは、アラン・ジェヌティオ Alain Génétiot 氏が、2000 年 11 月 28 日、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 216 教室で行われた特別講義の原稿に、氏自身が若干の加筆修正を加えられたものである。

アラン・ジェヌティオ氏は、1965 年生まれ、パリのエコール・ノルマル・スーペリキュールとパリ第 4 大学に学び、現在はパリ第 4 大学フランス文学科の助教授である。1999 年秋より自ら希望して、数年間の予定で京都大学に外国人教師として出向し、フランス文学を講じておられる。(ちなみに、この講演会の半月ほど前に同じ教室で、パリ第 8 大学の Jean-Nicolas Illouz 氏が、「Musique du poème dans la période symboliste」と題する講演を行われたが、両氏は、エコール・ノルマルの同期生だとのこと。)

ジェヌティオ氏は、年齢的には若手であるが、17 世紀フランス文学特に詩歌の領域で、すでに多数の優れた業績を挙げ、将来を嘱望されている気鋭の研究者である。代表的な仕事として、*Les genres lyriques mondains (1630-1660)* (Genève, Droz, 1990) と *Poétique du loisir mondain, de Voiture à La Fontaine* (Champion, 1997, « Lumière classique ») の 2 点がある。前者は、「サロンの抒情詩」とはいかなるジャンルかという問いから出発して、標題の時期に活躍した 4 人の詩人 (ヴォワチュール、ヴィオン・ダリブレ、サラザン、スカロン) の作品に斬新な考察を加えているが、本書の元になったのは、ジェヌティオ氏が、20 代の始めに、マルク・フュマロリの指導を受けて執筆した修士論文である。後者は、前著の成果を踏まえて、サロンの詩歌を、ギャラントリーの美学と古典主義的な趣味の形成との関連において研究することをテーマとする博士論文であり、やはりきわめて高い評価を受けてシャンプيون社から出版された。その後も、サロンの文学活動、なかんずく「会話」の美学、そして 17 世紀の詩歌一般について精力的な研究を続行している。トリスタン・レルミートの全集編纂にも参加し、詩集 *La Lyre* の批評校訂版が近く刊行される予定である。

以上の紹介からも推察されるように、ジェヌティオ氏の研究の本領は、17 世紀の詩歌の中でも、社交界の恋愛詩にある。この領域は、古典主義の美学

と趣味を考える上で不可欠であるが、日本では、福井芳男氏の画期的な業績 (*Raffinement précieux dans la poésie française du XVII^e siècle*, Nizet, 1964) にもかかわらず、よく知られているとはいえない。ジェヌティオ氏の存在は、日本の 17 世紀フランス文学研究にとってきわめて大きな意味をもっている。

ところで、今回の講演では、17 世紀詩の別の側面、すなわち宗教と神秘の側面が考察されている。しかもこの側面は、さまざまな愛の表象、神聖な愛と世俗の愛、霊的な愛と官能的な愛のそれぞれの表象との関連で考察されている。実は、これは、筆者がジェヌティオ氏にお願いしたテーマである。それは近年、筆者が 17 世紀フランス文学における「愛」の観念、それも宗教やモラルとの絡みあいのうちにある「愛」の問題に関心を寄せて、大学院のセミナーでも、それに関連するテキストを読んでいるからである。2000 年度の授業計画を立てるに際しては、そのような問題意識に導かれて、パスカルの『プロヴァンシアル』の第 10 信、およびニコルの小品『愛徳と自己愛について』を取り上げることにした。しかしながら、愛との関係といえば、宗教詩のほうが、はるかに重要で興味深い材料を提供してくれる。しかしそれは、パスカルやニコルの散文に比べると、はるかに近づきにくく、筆者の手に余る。どうしたらよいか、とつおいつ思案していたところ、京都に着任してまもなくのジェヌティオ氏と面識を得て、17 世紀フランスの宗教詩における愛の諸相について、特別講義をお願いすることを思いついた。ジェヌティオ氏は筆者の依頼に快く応じてくださり、周到な準備の上で、きわめて意欲的な講義をしてくださった。それを活字で再現したのが、ここに掲げたテキストである。バロック期の宗教詩が「愛」のテーマと取り結ぶアンビヴァレントな関係を広い視野のもとに一望すると同時に、取り上げた詩篇のそれぞれに微妙繊細な分析を施すジェヌティオ氏の手腕には敬服するほかない。本論文が、フランス・バロックの宗教詩に対する新たな関心を、日本のフランス文学研究者と愛好家のあいだに呼び覚ますことを切に願っている。